

懺悔の勧め

「ナントカ還元水」の答弁で話題になった松岡利勝・農林水産相が五月二十八日、自らの生命を絶った。真相は闇の中となったが、議員宿舍の光熱費問題と官製談合事件で追いつめられたらしい。翌朝の朝日新聞では、神戸学院大大学院の上脇博之教授がこう分析していた。

「松岡氏は説明責任を全く果たしていない。首相の政治責任も大きい。自分の内閣を守るために松岡氏をかばった。かえって松岡氏は逃げ場がなくなったのではないか」

ニュースを聞いて、だれしも直感したことだろう。野党の追及を強気

南無
善財

すがわらのぶお
菅原伸郎

東京医療保健大学教授

にかわしているかに見えたが、内心では「あーあ、大失敗。白状して謝るべきだよな」と思っていたのではないか。しかし、任命した安倍晋三首相は辞任を勧めなかった。総裁選で自分を担いでくれた論功行賞に大抜擢したメンツがある。そして、不祥事がほかにも続いていたから、失点を重ねたくなかったのだろう。

自分の過ちに気付いても、それと認めたり、辞めたりすることは許さない——この国では、そんな悲劇

がしばしば起こる。政治家の秘書とか役所の係長とか、とかく下で支える人物が汚職事件などから自分で殺もする。個としての人生より、集団としての掟が優先されている、と欧米人には映るだろう。

それにしても、六十二歳の現職大臣がなぜ生命をあつさり絶つのか。大なり小なり、人間は間違いは犯すものだ。自分を見つめれば、恥ずかしいことは数々出てくる。といって、そのたびに死を考えていては自分も社会も立ちゆかない。時とともに忘れるのではなく、何か本当の救いはないものか。道徳教育で使われている文部科学省編「心のノート」にはこんな文章がある。

《あやまちは、これからの自分をよ

くしていくための「たから」となります。それには、あやまちをしてしまった原いんをよく考えて、「もう、これからはぜったいにしないぞ。」と、強く思うことです。そして、あやまちを人のせいにしたり、ごまかしたりしないことが大切です。……昔から言われていることわざに、次のような言葉があります。「失敗は成功のもと」(小学三、四年用)

か。刑務所が再犯者であふれている現状を考えても、本当はこちらこそが大切なはずである。「懺悔」という言葉がある。キリスト教ではこれを「さんげ」と読んで、神の前で自分の罪を告白するよう勧められる。カトリックなら、司祭にすべてを打ち明け、神の赦しを乞うことになるだろう。

癡により、身口意よりの生ずる所なり。一切を我れ今みな懺悔す」という懺悔文を唱えたものだ。しかし、寺院では儀式化され、自分を見つめる本来は忘れられている。そして、あまりに通俗的なこの社会では死語ともなっているのではないか。

